
この日から幻想入り

yo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この日から幻想入り

【Nコード】

N3770L

【作者名】

yo

【あらすじ】

ある日、雨が降っている中
今から久しぶりに遊びに行く時
東方の話で盛り上がっていた。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

誤字・脱字がありましたら、すみません。
初心者ですが、がんばって書きたいです。

プロローグ

雨が、ザーザーと音を立てながら降っている。

俺、あめうちりゅう雨内 流と友達たくまの拓真二人で東方の話で盛り上がっていた。

流「風神録のEXクリアできねー」

拓「諏訪子強すぎる」

流「まあーしょーがないでしょ」

拓「それもそうか」

そんな話をしながら帰り道を歩いていた。

流「幻想郷って存在すると思う？」

拓「思う！」

？「もちろん存在するわ」

流「だよなー」

「……………」

しばらくの間、空白

拓「あり？」

流「なんか一つ多いような……………」

拓「気のせいだよ」

流「そうだよな」

と思った瞬間なぜか二人とも下に急落下した。

プロローグ（後書き）

どうでしたか？

これからも、がんばって書いていきたいです。

幻想入り(前書き)

最近、忙しく更新できませんでした。
それでは、どうぞ

幻想入り

今、なぜか俺は目ばかりの空間を落下中である。

流「うああああああああああああああああああ」

流（あー叫ぶのも疲れてきたなあー）

と思いつつ落下していると、下の方から光が見えてきた。

流「そろそろ出口か・・・」

（そういえば、拓真も落ちたけど大丈夫かな？）

光の中に入ると、空から落ちていた。

流「ちょっと、マジですか!」

（まずい、このままでは竹やぶに突っ込むじゃないか）

と思った時すでに竹やぶが迫っていた。

そして、竹やぶに落ちた・・・。

流「いてえー!」

（とりあえず、地面直撃は避けられたが、竹の葉で全身

スタスタじゃねーか。痛えええ）

うつ伏せになりながら、今後について考えていた。

流（もし、あのスキマが紫のものだとしたら

ここは幻想郷という確率が非常に高い）

（あーやべー出血意外とひどかったみたいだなー

意識が遠のいてきたな……）

そのまま意識がなくなった……

SIDE 拓真

拓「ちよつ、これもしかして紫様のスキマ……
やべ、テンション上がってきた」

そう言いながら落下していると光が見えてきた。

拓「俺も幻想入りか……」

（あの紅い屋敷、紅魔館か？

うれしいけど俺その上落下中なんだけど……）

そして、見事に屋根に激突した。

土煙が舞っている中なにか柔らかいものが手先にあることにきずいた。

拓（んーこれは抱きついて見なくては、なぜなら俺の本能だからだ）

その瞬間、なにかに殴られた衝撃がはしり壁に吹き飛ばされ、気を失った……

幻想入り（後書き）

はやめに、更新はしていきたいです。

目覚め（前書き）

お久しぶりです。

テストが忙しいです。

目覚め

目が覚めると知らない天井、そして闇の中に光る月光

流「俺、何日くらい寝てたんだろう傷も治ってるし、
それにしても綺麗な光だ。きっと満月だろう。」

外に出てみようと思つたと予想どおり綺麗な満月があった。

流「すげー綺麗だなー写真撮りたかったなー」

(そういえば、俺の持ち物はどこへ・・・)

目を眺めていると足音が聞こえた

流「やべ、誰か来た！」

そう思いながら寝てた部屋に戻ると
兎の耳？を付けた少女が部屋に来た。

？「起きましたか？」

流「寝てた方が良かったですか？」

(うん、どう見ても鈴仙だよな・・・)

鈴「ちよつと待っていてください師匠を呼んできますね」

そう言い部屋から出て行った・・・

流「鈴仙がいるって事はここは永遠亭・・・って事はやっぱり幻想
郷ですよー」

師匠って事は永林が来るはず・・・

そんなこと思っていると鈴仙達が来た・・・。
予想どおり、永林を連れてきた。

永「気分はどう？」

流「傷も治りましたし、前より体が軽くなりました」

永「そう、よかったわ」

流「ところで、俺何日くらい寝てました？」

永「まあ、3日間程寝ていたわね。あと荷物は預かっているわ」

流「なんか、すいません3日も・・・」

永「大丈夫よ、まあとりあえず今日はお休みなさい」

流「はい、わかりました」

永林が部屋から出ていくと、俺は布団に戻った。

流（そうか、3日も寝てたのか・・・なんかちょっと悪い気がするな・・・）

そう思い俺はまた眠った・・・

次の日の朝、俺は朝日に照らされ目が覚めた。

流（完璧に目が覚めた、さてと起きるとしますか）

部屋から出て周りに竹林があった。

流（さて、どちらに行こう？まあ迷っても仕方がない行こう）

歩きはじめすぐに鈴仙にあった。

鈴「おはようございます、今行こうとしていたんですよ」
流「そうか、ありがとう。」

鈴「案内しますので、ついてきてください」

少し歩いてある部屋に着いた。

鈴「師匠、流さん連れてきました」

永「入ってきて」

そう言われ部屋に入った。

そこには、輝夜とてゐ、永林がいた。

永「自己紹介が遅れたわね、私が八意 永琳よろしくね」

輝「私が、蓬萊山 輝夜よろしく」

て「因幡 てゐ、よろしくうさ」

鈴「鈴仙・優曇華院・イナバと言います。鈴仙と呼んでください」

全員が、紹介を終わらせ俺に回った。

流「雨内 流って言います。流と呼んでください」

(やっぱ、敬語使わないとまずい気がするな・・・)

永「流は、これからどうするの?」

流「うーん、特に決まってるないです」

永「そう、泊る所は?」

流「いえ、すいませんです」

永「ここに、しばらく泊まる気はあるかしら?」

流「みなさんが、よろしいのなら泊まりますが・・・」

鈴「私がかまいませんよ」

て「別に、いいいな」

輝「いいんじゃないかしら」

永「というわけで、決定ね」

流「よろしくおねがいします」

自己紹介、お泊り交渉が終わり一息つくと・・・

永「まず、流には働いてもらうわ」

流「はい、わかりました。一体何をすれば？」

（さすがにタダで泊まりはないと思ったが・・・）

永「主に家事全般、あと私が手伝ってほしいときね」

流「了解です」

（家事全般って経験した事あるけどできるかな・・・）

永「わからないことがあったら、鈴仙に聞いて」

流「鈴仙さん、改めましてよろしくおねがいします」

鈴「こちらこそ」

永「じゃあ、まず鈴仙ここを一通り案内してきて」

鈴「はい、流さん着いて来てください」

流「わかりました」

その後、いろいろ教えられてもらい一人でできるようになった。

その頃には、日も暮れて外は暗くなり夕食の時間になった。

鈴「流さん、これ運んでください」

流「はい、どこらへんにですか？」

鈴「そことあっちです」

流「わかりました」

すべて運び終わりみんなで食べた。

食べ終わりがたずけを手伝った。

俺は部屋に戻っていいと言われたので戻った。

流（なんか、疲れたけど働いたって感じがするな・・・）

そのまま、眠りに入った・・・

S I D E 拓真

拓（おーすげー俺、生きてるYO）

そう思い起き上がるとやはり、まだ殴られたような感覚がはしった。

拓「痛ええー！ー！」

拓（あ、声出しちゃった。まあいいか起きよう）

立ち上がると少しふらつくが歩けた。

カーテンを開けるとまぶしい太陽があった。

拓（久しぶりに見るとまぶしいなあー）

さっきの声を聞いたのか誰か来た。

ドアが開きメイドが一人立っていた。

拓（あれは、咲夜・まちがいない）

咲「体の方は、大丈夫ですか？」

（お嬢様のパンチを受けたのに生きているのも驚いたに、もう立てるなんてね）

拓「もちろん、大丈夫」

（まあ、腹痛ーけど）

咲「お嬢様がお呼びですので、ついて来てください」

咲夜に着いて行くと、ある扉の前に着いた。

拓（うーんこの感じレミリアがいるにちがいない）

咲「では、こちらへ」

連れていかれると、やはりそこにはレミリアが座っていた。

拓（カリスマ感、すごいなあ）

レ「私は、この館の主レミリア・スカーレットよろしく」

レ「そっちのメイドが十六夜 咲夜」

咲「よろしくおねがいます」

拓「俺は、拓真よろしく」

レ「あなた外来人ね、どうやってここに来たのかしら」

（まあ、予想はつくけどね）

拓「スキマから落ちた」

レ「そう、あなた泊まるところがなさそうね」

（予想どうりね）

拓「もちろん、落ちてきましたから」

（来たことはどうでもいいのか？）

レ「ここに、泊まる気はないかしら？」

拓「泊めてくれるんだったら泊まりますが？」

レ「ええ、泊めてあげるわ。ただし、条件があるわ」

拓「どんな、条件？」

レ「妹と遊んでもらうわ」

拓「まじで！・・・そんな事でいいのか？」

（以外だZE、ということはフランに会えるという事）

レ「もちろん、生きて帰ってこれたらね」

拓「もちろん、生きて帰ってきますよ」

レ「咲夜、案内お願い」

咲「かしこまりました。では、拓真さん着いて来てください」

そう言われ、ついて行った・・・

目覚め(後書き)

次は、がんばって早く投稿したいです。

能力（前書き）

すいません、漢検、県大会など
いろいろ、忙しく大変でした。

そろそろ、夏休みなんで積極的に更新していきたいです。

能力

SIDE 流

今日も、いつもと同じ晴れた一日。

俺が、来てから3日程たった、その間にスペルカードルールなど幻想郷ルールを学んだ。

ある日・・・

俺は、いつもどおりに家事のいつかんである洗濯をしていた。慣れてきたのか、来た時よりは早くなった。

そこへ、俺をさがしていたのか鈴仙が呼びに来た。

鈴「流さん、お客さんです」

流「はい、今行きます」

(お客？一体誰だ?)

お客が来たという事で俺は客が待っている部屋に行った。

「失礼します」と言っ戸を開けた。

そこに居たのは・・・紫だった。

紫「あら、はじめましてかしら？」

流「まあ、とりあえず初めまして雨内 流です」

紫「八雲 紫よろしく」

流「こちらこそよろしく」

紫「さて、今日来た理由は1つあなたの能力についてよ」

流「俺の能力・・・そんなの知らないが？」

紫「安心しなさい、それを調べにきたのよ」

流「なるほど」

紫「納得したのなら話が早いわ」

そう言い俺の頭に手をのせ目を閉じた。

そのまま、5分程たった・・・

紫「なるほど、わかったわ」

流「俺の能力は？」

紫「あなたの能力は、反射させる程度の能力」

流「反射かぁ」

(いずこの一方通行か)

紫「能力は、説明しなくてもわかるわね」

流「まあ、つまり攻撃を反射することができると言っわけか？」

紫「そうね、ただしスペルカードはできる物の限度があるわ」

流「そうか、つまり戦闘にも日常生活にも不向きってことか」

紫「まあ残念だけど、そういう事ね」

流「一つ、聞きたい事があるんだがいいか？」

紫「かまわないわ」

流「幻想郷には俺以外にもう一人来てるのか？」

紫「もちろん、あなたの隣にいた子もね。もう、帰ってもいいかしら？。」

流「最後に一つ、そいつは今どこにいる？」

紫「秘密。じゃ、またね」

そう言い、スキマを開いて何所かへ行ってしまった。

俺は、誰もいなくなった部屋から出て拓真と能力について軽く考えた。

流（拓真は、死なないから大丈夫だろう、車にひかれて無傷で済むという事もあったから。

反射かぁ、意味がないなら弾幕を自力で避けるという事が自信ね〜）

そう考えているうちに、鈴仙が俺の代わりに残った洗濯をしていた。

流「すいません、俺がやります」

鈴「もう少しなので、洗ったやつ干しててください」

そう言われ、洗ってある物を干している時に鈴仙が聞いてきた。

鈴「流さん、ところでなんの話でしたか？」

流「能力についてでしたよ」

鈴「それは、つまり流さんにも能力があったということですか？」

流「はい、能力を反射させる程度の能力でした」

鈴「能力がわかったなら、訓練してみますか？私でよかつたら相手のなりますよ」

流「そういうことなら、お願いします」

鈴「じゃあ、明日からでもやりましょう」

訓練の話をしていると洗濯が終わりすべて干し終わった。

流（明日、晴ればいいなあ）

S I D E 拓真

レミリア・スカーレットとの約束により俺は、その妹ことフレンドール・スカーレットと

遊ばなければならぬらしい、そういわれ準備やなんたらで3日も待たされた。

長すぎるだろと思ったが、会えるのに変わりないので我慢した。俺、偉い！偉すぎる！

そして、案内され地下の扉に来た。

咲「拓真さん、無理だと思ったら言ってください」

（拓真さんの真顔初めて見た）

拓「ああ、ありがとう。行って来る」

（うれしい、素晴らしいほど、うれしい。なぜかって？そりゃ、フランに会えるからさ！）

そして、扉を開いた。（案外重かったぜ）

中は、意外と暗かった。だが、中に紅い服を着た少女が一人座っていた。

咲「妹様、遊び相手を連れてきました」

フ「ほんと！ちょうど退屈していたの」

拓「どうも、俺が遊び相手の拓真だ、よろしく」

フ「私はフレンドール、フランって呼んで。さっそく遊ぼ」

拓「じゃ、何して遊ぶ？」

フ「弾幕ごっこしよう。弾幕ごっこー」

拓「弾幕ごっこか、しょーがないな」

フ「よし、じゃあよーいドン！私が、先攻ね。壊れないでね」

禁忌「カゴメカゴメ」

周りに緑色の弾が囲むように放たれる。その後、弾が一つ一つ四方八方に飛んでいく。それを、いとも簡単に避けていく。

フ「へー、じゃあこれはどうかな？」

禁弾「スターボウブレイク」

色とりどりの弾がこっちに向かって飛んでくる。

拓（あーやべ、当たるかも。このスペル避けるの苦手なんだよ）

そう思いながらも避け続けるがついに、右手にかすった。右手からは、けっこうな血が出た。

拓（痛い、でも避けなくては死ぬ）

フ「そろそろ、最後かな？」

禁忌「レーヴァテイン」

フランの手に炎の剣が握られ、一気に間を詰められる。剣が振られるが危なく当たる所でぎりぎり回避する。だが、そのあとに炎が残ったため軽く火傷を負った。

拓（やべー意識がもたねー、クソこんな所で終われるか）

フ「これで、最後！じゃあね」

俺の腹部を狙って斬ってくる。

拓（なんか、俺の能力発動しないかな。やってみるか）

「壁まで吹っ飛ばせ！」

その時、フランの体が壁めがけて飛んで行き、激突した。

フ「痛た、おもしろいじゃん。本気でいくよ！」

そして、フランは急に消えた。

拓「俺に攻撃は、絶対当たらない」

後ろから、急にフランが現れ剣で斬りつけた。

だが、なぜか拓真の真横を斬りつけた。

フ「なんで、当たらないの？もういつちよ」

また、姿を消した。しかし、拓真の手の出血量がさっきよりました。

拓（そろそろ、終わらせないと。だけど、どうする？俺は攻撃するものは・・・あった。試すか）

「俺に来る攻撃は、相手に反射する」

今度は、目の前に現れ斬りつけた。

その剣は、拓真を斬ったつもりだが自分に返ってくる。

フ（え？うそ、なんで？）

そのまま、自分に返った剣が目の前で消える。

拓（やべ、もう駄目だ。意識がたもてねー）

そして、拓真は倒れる。

フ「あれ？なんで、もうおしまい？」

（久しぶりに、楽しかったな。でも、なんで倒れて動かないんだろ
う？もしかして、死んだ？とりあえず咲夜を呼ばなきゃ）

フ「咲夜ー、拓真？が壊れちゃた」

咲夜が、急に現れる。そして、拓真の応急処置をして抱えた。

咲「妹様も、ついて来てください」

そう言い、フランも抱え寝室まで移動した。

SIDE ????

？「よっしゃー、今日は早く帰れるぞ」

少年は、帰りのホームルームが終わり全速力で、家に向かおうとして走っていた。

そこで、へんなスキマに入って行く人がいたが、そこはあえて無視し家に向かった。

？「ただいまー……つても誰もいないか……」

カバンをとりあえずおろし、バイトの準備をしていた。
準備を迅速に終わらせ、時間が余るので軽く昼寝をすることにした。

？（そういえば、流、拓真達と離れてから今日で1カ月か……早いな）

そう思い、眠りについた。

能力（後書き）

また、オリキャラを一人出す予定です。

それでは、次に会いましょう。

練習（前書き）

夏休みに入りました。

暑いですが、がんばりましょう。

練習

SIDE 流

今日も同じくよく晴れた朝時、俺はいつもより早く起きてしまった。なぜ、起きてしまった。かと言うとやることがないからだ。

流（なに、しょうかな？眠くもないしな）

そう思いながらも、いまだに布団にくるまっている。

流（よし、とりあえず起きるか）

起き上がり、戸を開くと朝日が目に染みだした。目をこすりながらも、縁側に座る。

流（朝日が気持ちいいし、空気もうまいな）

そのまま、少し考える事にした。

流（洋、元気かな。あいつの事だ、きっとバイトばかりしているんだろう）

相変わらず、なんでこんな事しか考えないかも不思議で仕方がなかった。

流（さて、そろそろ朝食の支度でもするかな）

立ち上がり、台所へと向かった。

流（今日そういえば、能力の練習を手伝ってもらえるはず・・・）
そう思いながら、釜の火をつけ食材を切っていく。

流（練習って何をするんだろう、まあいいか）
料理を盛り付けて、テーブルに並べる。

流（ふうー全部終わった・・・みんな起きてこないな）
部屋に戻り、荷物を探る。

流（どこだっけ・・・あった）
イヤホンを耳につけ、曲を聴きながら寝そべる。

流（やっぱ、久しぶりに聞くといいなあ）
しばらく聞いていると、物音が聞こえてきた。

流（みんな起きてきたかな？）
電源を切り、居間に向かう。

流「おはようございます」

鈴「おはようございます、流さんが朝食作ってくれたんですか？」

流「はい、いつもより早く目が覚めたので」

鈴「今日は、練習しますか？」

流「はい、よろしくお願いします」

そう言い、みんなそろったところで朝食を食べはじめた。

食べ終わったものをかたづけ、洗う。

鈴「では、外に出ましょう」

流「はい」

永「二人とも今日の家事休むなら、あとで私のとこにきなさい」

鈴・流「はい・・・」

(なぜか、すごく嫌な予感が・・・)

とりあえず、広い所へ・・・

鈴「まず、弾幕を避けるところから始めましょう」

そう言い、弾を出し始める。
一度見たことがあるので、なんとか避けれた。

鈴「合格ですね、次に能力を使ってください。口で唱えながらやると、上手くいきますよ」

また、弾を出し始める。

自分に近づいてくる・・・

「反射」

こっちに向かって来たのが、鈴仙めがけて反射した。

流（まずい、反射方向、間違えた・・・）

だが、鈴仙はまた弾を出し相殺した。

流「すいません、方向間違えました」

鈴「大丈夫ですよ、それでは次いきますよ」

そう言い、方向を考え反射させる。
反射することによりやはり疲れてきた。

鈴「そろそろ、休憩しますか？」

流「そうですね」

しばし、休憩をしまた始める。

何度か繰り返すうちに、なれはじめ唱えなくてもできるようになつた。

そして、日が暮れていく……

鈴「そろそろ、帰りましょう」

流「そうですね、夕食を作らないと」

歩っていると、隣で急にドンツと音がした。

隣を見ると、鈴仙がいない。

よく見ると穴がある覗いてみると案の定、鈴仙が落ちていた。

流「鈴仙さん、大丈夫ですか？」

鈴「なんとか、手を貸してくださいませんか？」

流「言いですよ」

と言い鈴仙を、引き上げる。

鈴「ありがとうございます」

(てみだなあ、覚えているよ)

流(なんか、声掛けずらいなあ・・・)

沈黙の中を歩き永遠亭についた。

鈴仙は、用事があるとかで先に行つててと言うので先に台所に来て夕食の支度をする。

流(そういえば、永琳が呼んでたな・・・終わつたら行こう)

鈴「待たせてすみません」

流「これが、終わつたら永琳さんの所に行きましょう」

鈴「はい・・・」

流(なんか、異様にテンション下がったぞ)

料理もすべて並べて、みんなを呼ぶついでに永琳さんの所に行った。

永「これを飲んで頂戴」

流「これをですか・・・」

変な色の液体を出された。

いざ、飲もうとすると体が拒絶する。

流（しゃーない、一気に行くか）

そして、グビツと一気に飲み干した。

俺が、飲んだのを見ると鈴仙も飲み干した。

流「特に変化は、ないですね」

鈴「なんか、ボーツとしてきました」

そう言い、二人共倒れてしまった。

永「いい研究結果が得られたわ」

SIDE 拓真

ここは・・・

紅魔館の中か・・・

あれ、たしか俺フランと戦ってそれから倒れて・・・

やべ、どうしよう起きれないや・・・

隣に何かくっついているな・・・

見なかったことにして、寝るかな・・・

おやすみ。

SIDE 洋

バイトも終わり、休みの日。

洋「暇だなあ、何をしようかな・・・」
（って誰に話しているんだか・・・最近、独り言が多いなあ）

紫「そうね・・・とりあえずお茶でも飲みましょう」

洋「そうですね、ちょっと待っていてください」

(今は、気にしないほうがいいな)

とりあえずお茶を準備する。

お茶を注ぎ、持っていく。

洋「どうぞ」

紫「ありがとう」

軽くお茶を飲む、やっぱりうまい。

洋「ところで、なんの御用ですか？」

紫「様子見というところね」

洋「俺の能力についてですか？」

紫「まあ、それもそうですね」

洋「特に、使ってもないし異常もないですよ」

紫「こっちに来る気は？」

洋「もうそろそろかな」

紫「いますぐは？」

洋「準備ができ次第」

紫「決定ね、1時間後に迎えにくるはね」

洋「わかった、泊まる所とかは？」

紫「あなたの能力は、下手に暴走を起こすと世界が危ないからとりあえず、私の所に」

洋「ああ、わかった」

紫「それじゃ」

そう言い、スキマに消えた。

さて、紫に会ったのは変なスキマを見てからだ
それ以来しよっちゅう家に来た。

洋「準備完了、あと少しだな」

少し待った結果、スキマが開いた。

洋「素晴らしいですね、1時間丁度」

紫「さて、行くわよ」

紫が先に入り、俺も後に続く・・・

スキマの中は、気味が悪かったがすぐに慣れた。

そして、スキマを抜けると大きな家の前についた。

洋（うん、明らかに規模が違うね）

紫「ここが、迷い家。さあ、入るわよ」

洋「つまり、ここで寝泊まりしつつ能力の制御をしろと？」

紫「ええ、そうよ」

洋「了解」

そして、俺はここで暮らす事決定した・・・

練習（後書き）

次も、早い更新をと自分で思います。

がんばります。

再会（前書き）

お久しぶりです

すいません、もう不定期更新です。

再会

S I D E 流

流（・・・ここは・・・部屋か・・・）

起き上がると頭がボーっとした。

流（うわーなんか気持ち悪い。なんで、こんな気持ち悪いんだっけ・
・・・）

そしてしばらく考え、思い出した。

流（あーそういえば、永琳になんか薬飲まされてそのまま・・・）

立ち上がるうとしたが、そのまま倒れこんだ。

流（立ち上がれそうにないから寝てるかな。今日はいいかな寝よう）

そして、一日中寝た。

SIDE OUT

SIDE 洋

洋（あーよく寝た、こんな寝たの小学生の頃くらいだもんなあ）

部屋から出て、昨日案内された台所に向かう。

洋（昨日一日で屋敷すべてを覚えろと言われ、よく覚えてたな俺・

・

やっぱ能力のおかげかな？）

台所について、藍が朝食の支度をしていた。

洋「おはよう、手伝うか？」

藍「いや、大丈夫だ。すぐできるから、座っててくれ」

洋「わかった」

言われたとおりに、座って待った。

4人分の量をテーブルの上に置いた。

洋（この量を一人でやるとは、さすが藍様！）

みんなを待った方がいいのかと思い、待つことにした。

10分程たつと、橙が起きてきた。

洋「おはよう、橙」

藍「おはよう、橙」

橙「おはようございます」

藍「さて、そろった所で食べるか」

洋「紫は、いいのか？」

藍「紫様は、起きられるのが遅いからな後でいいんだ」

紫「そうとは、限らないわ」

藍「紫様！一体どうしたんですか？」

紫「少し、用事があったね。朝食を食べたら出かけるわ、洋もついできなさい。」

洋「なんで俺もなんだ？」

紫「それは、行ってから教えるわ」

橙「ところで、どこに行くんですか？」

紫「紅魔館に行くわよ。さて、食べましょ」

「いただきます」

～～～食事中～～～

「じちそうさまでした」

紫「洋、いくわよ」

そう言い、スキマを開き入って行った。

後を追い、俺も入った。

洋「ところで、本当に何をしに行くんだ？」

紫「あなたの能力とでも言っておこうかしら」

洋「そういえば、俺の能力って……」

くく昨日くく

洋「紫、なんのようだ？」

紫「あなたの能力を確かめたいの、いいかしら」

洋「別にかまわないが、どうやるんだ？」

紫「もう、調べたわ」

洋「それ絶対、許可を得る前に調べただろ」

紫「まあ、いいじゃない。知りたいかしら？」

洋「はい、お願いします」

紫「あなたの能力は『能力を操る程度の能力』よ」

洋「ところで、その能力はどんな事ができるんだ？」

紫「そうね、能力の創造、削除、付与・・・能力を操れるのなら何でもできるわ」

洋「結構、チートな能力だな」

紫「一つ、聞いていいかしら？」

洋「もしや、それって俺に実は、霊力のほかに妖力もあるとか言わないだろうな・・・」

紫「なんで、わかったの？」

洋「なんでって、話の展開的に」

紫「案外、鋭いのね」

洋「ありがと」

～～回想 終了～～

洋「そんな事も、あったな」

紫「そういえば、あの後能力は試した？」

洋「まあ、一応な……。ところで、どうして俺には妖力があるんだ？」

(あんな事があったからな……。言えねーよ)

紫「さあ、今の所わからないわ。あなた、私に会う以前妖怪に会ったことは？」

洋「ないが、なんか人を助けようとしたら噛まれた記憶はあるが」

紫「その時かも知れないわね」

話している間に光が見えてくる。

洋「そろそろ、出口だな」

そして、光の中に入り込み紅い屋敷が見える。

紫「ここが、紅魔館よ」

洋「まあ、知っていたけど。思いのほか紅いなあ」

紫「あら、知っていたの？」

洋「黙っていたが、ここのはとんどの事知ってるぞ」

紫「あら、本当にだったら説明が楽ね。とりあえず、行きましょう」

洋「そうだな」

そう言い、紫のあとをついて行った。

歩いて行くと、メイドが急に現れた。

咲「お二人様、お待ちしていました。お嬢様がお呼びですのでこちらへ」

咲夜について行って、扉の前についた。

咲「どうぞ、こちらでお嬢様がお待ちです」

紫「ほらっ、洋行くわよ」

そう言われ、紫の後をついて行く・・・

部屋の中に行くと、この屋敷の主・・・レミリア・スカーレットが座っていた。

レ「あら、あいさつかしら？」

紫「ええ、そんな感じかしら。洋あいさつしなさい」

洋「どうも、レミリア・スカーレット、俺は嵐刹らんせつ 洋能力は『能力を操る程度の能力』よろしく」

レ「随分、私に詳しいわね」

洋「まあ、ちょっとした知識だ・・・」

レ「用件は聞いてるわ・・・でも悪いわね今こっちは忙しいの」

紫「忙しい、どうしてかしら？」

レ「あなたが、こっちに送った外来人のせいよ」

紫「あら、ここに落ちたのね」

洋「おいおい、人事だな」

レ「まあ、いいわ。咲夜呼んできて頂戴」

咲「かしこまりました」

S I D E O U T

S I D E 拓真

拓「……え？、これどんな状況？」

目が覚め、起き上がるうたとするとフランが腕にくっついてた。

拓「おい、フラン起きろ」

フ「ん？おはよう拓真」

拓「悪いが腕から離れてくれないか、起きたいんだけど」
(かわいすぎるだろ、どうしよう)

フ「うん、わかった」

そう言い、離れた時扉が開いた。

咲「妹様、お嬢様がお呼びです」

フ「わかった、拓真ついてきてくれる？」

拓「おう、いいぞ」

(この目は、反則だろ・・・)

起き上がり、扉に向かおうとした時フランが背中に飛びついてきた。

拓「ん、どうした？フラン」

フ「ごうやって、行ってもいい？」

拓「いいけど、落ちるなよ」

(やぐ、理性よ、保ってくれ)

〳〳移動中〳〳

咲「お嬢様、連れてきました」

扉が、開き中へ入るとレミリアと見おぼえがある人影が二つ・・・

レ「来たようね、あら拓真も一緒だったの」

フ「お姉さま、なんの用ですか？」

レ「少し、遊んでほしい人がいるのよ」

洋「あ、拓真久しぶりだな」

(こいつ、ついに手を出したか?)

拓「なんで、お前がいるんだ？」

(洋の視線が・・・なんだ、この感覚)

紫「あら、知り合いなの？」

洋「昔、少しあってな」

レ「フラン、遊んでほしいのはこの人よ」

フ「え〜、私拓真と遊びたい」

レ「拓真は、やってもらう事があるからその間だけでいいわ」

フ「うん、わかった」

拓「やってもらう事？」

レ「紫に聞きなさい」

紫「能力を確かめるだけよ」

拓「フラン、降りて」

（なんか、寂しいな）

素直に降り、洋の方へ行つた。

洋「さて、邪魔になるからあっちに行くか。咲夜さん、広い部屋に案内いいですか？」

咲「かしこまりました、こちらへ」

そして、三人は他の部屋に行った。

拓「思ったんだが、レミアでも俺の能力はわかるんじゃないのか？」

レ「あなたの、運命が見れないのよ」

拓「ああ、なるほど・・・」

(なんでって聞きたいけど、わからないでかえされるだろうなあ)

紫「それじゃ、準備はいいかしら？始めるわよ」

拓「いいぞ、どうすればいいんだ？」

紫「ただ、目を閉じてなさい」

そう言われ、目を閉じた。

S I D E O U T

S I D E 洋

咲夜に連れられ、けっこうな広さのある部屋に着いた。

洋「さて、フラン弾幕ごっこでもするか？」

フ「本当に？いいの？」

洋「じゃなきゃ、広い部屋に行かないよ」

(遊び感覚で、能力の練習もするか・・・)

フ「んじゃ、早くやるつよ」

洋「ちょっと待って、咲夜さんナイフ5本くらい貸してくれますか？」

咲「はい、よろしいですけど何に使われるんですか？」

洋「見てからの、お楽しみかな」

咲（一体、5本だけでどうするんでしょう？）

洋「準備はできたな、よし始めるか。先攻はフランでいいぞ」

フ「いいの？んじゃ行くよ」

禁忌『フォーオブアカインド』

フランの分身が増え、4体になる。

洋（最初から、これか。さて、作った能力を試すかな）

『創造した物を取り出せる程度の能力』

洋（チートだね、さて形態は妖力投入で剣で、霊力投入で拳銃つとこれでいいかな）

創造したものが、手に握られる。

洋「うん、どうやら成功みたいだな・・・」
（霊力投入・・・、まず一体一体確実につと）

拳銃を、一人目に撃つ・・・

しかし、かわされる。

フ「こんな物じゃ、当たらないよ」

洋「余所見は、しない方がいいぞ」

そのとたん、さっき撃った弾が後ろから百発程になり、戻ってくる。

余所見をしていたフランは、反応が遅れ弾に当たる。

全弾命中し、消える・・・

洋「油断しないほうがいいぞ・・・次はっ」と

フ「こつちには3人いるんだよ」

洋「こつちが不利だなあ、よし人数減らすか」
(えーと、あと一つ的能力・・・)

『限界を操る程度の能力』

洋(ナイフの数を・・・1000本でいいかな？
まあ、大丈夫だろうな・・・これで決める)

ナイフを、5本投げる・・・

一気に数が増え、1000本になりフランを襲う・・・

咲(すごい、数・・・どうして)

洋「終わったかな？、500本にすればよかったなあ」

フ「まだまだよ、洋すっごくおもしろいね」

禁忌『レーヴァテイン』

フランに、炎の剣が握られる

そのまま、俺に飛びかかってくる

洋「おお、流石だな・・・今度こそこれ最後な」
(妖力投入、形態を剣に・・・)

互いに剣がぶつかり、にらみ合う

洋「楽しいか？フラン」

フ「うん、とても楽しい」

洋「それは、よかった・・・でもそろそろ終わりの時間だな」

フ「いや、もう少し遊びましょう」

洋「いや、終わりにさせてもらおう」

フ「私を、倒せたらね」

お互いの威力の高まった剣同士がぶつかり、光が包み込んだ。

S I D E 拓真

紫「わかったわ」

拓「んで、俺の能力は？」

紫「能力が3つあったわ」

拓「マジで？」

（てか、レミアア、顔が・・・）

紫「でも、少し特殊なのよ」

拓「特殊とは？」

紫「2つの能力はいつもどおり使えるけれど、もう1つはある条件に達しないと発動しないのよ」

拓「その条件とは？てか、早く能力教えて待てない・・・」

紫「せっかちなね、条件は自分で調べなさい。それで能力は『重力を操る程度の能力』『再構築する程度の能力』そして、条件付きなのが『言動を実体化させる程度の能力』以上があなたの能力よ」

拓「再構築ってどゆ事？」

紫「つまり、構築はできないって事よ。ついでに条件付きは、言った事がすべて実行できるわ」

拓「構築が、できないって事は零からは何も作れないじゃん。てか、最後のチートじゃん」

その瞬間、洋は現れた。そういえば、あいつの能力って何？

瞬間的に現れたって事は、空間系の能力か？

あれ、洋がここにいるって事はフランは？

洋「なるほど、結構いい能力じゃないか」

紫「そして、能力はどう？」

洋「半端ないチートでした」

拓「お前の能力って何？」

洋「俺？『能力を操る程度の能力』だけ」

紫「洋、そろそろ帰るわよ」

洋「了解、それじゃ」

そう言い、紫のスキマに入って行った・・・

拓「能力名だけじゃ、どんな能力かわからね〜」
(フランの様子でも、見てくるか)

レ「少し、妖力が感じられたけど、本当に人間？」

拓「多分・・・俺、フランの様子見てくる」

そう言い、部屋を出てフランのいる所へ行っただ。

S I D E
O U T

洋「あーやべー！」

紫「あら、忘れ物？」

洋「いや、あっちの時間があっているなら・・・」

紫「安心なさい、少ししか進んでいないわ」

洋「マジで、よかった」

紫「どうしたの急に？」

洋「日付が合うなら、明日義妹が来るはず」

紫「おかしいわね、あなた家族がいないでしょ」

洋「ここ来る前に、連絡が来てまあそれからいろいろとね」

紫「それで、どうするの？」

洋「あいつも、連れてくるかな」

紫「私が許すとしても？」

洋「思っているから言っている」

紫「そう、勝手にしなさい」

再会（後書き）

不定期ながらも、がんばって行きたいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3770/>

この日から幻想入り

2011年10月7日03時52分発行